

大学生が実現させた、中山間地の「スタディーキャンプ」



寺子屋シアンで中学生の学習をサポートする大学生（左奥）

中山間地の無人駅（樽見鉄道神海駅）で山学が開く小中高生向けの学習支援「寺子屋シアン」（岐阜県本巣市）で奮闘する3人がある。子どもたちの学習をサポートする大学生たちだ。彼らはいずれも市外在住だが、はるばるこの山あいまで定期的に通ってきてくれる。この夏、彼らの提案・支援によって、「スタディーキャンプ」と題した夏休み中の特別学習会を初めて開くことができた。なぜ、夏休み中に特別学習会を開こうと思ったのか。日々接する子どもたちの成長をどう感じたか。スタディーキャンプの主体を担ってくれた3人の大学生に聞いた。

■大学生3人の提案で実現したスタディーキャンプ

寺子屋シアンは平日週3日、17～20時に無人駅の旧駅長室で開いている。子どもたちが少ないこの山あいでは放課後の居場所や学習塾がなく、そんな地域の学びの場となることを目的に、2022年5月から開いてきた。（※1）

※1：OKB REPORT 2024 Vol.195『[地方創生10年の節目で考える、「〇〇下校」がある中山間地の教育のこと](#)』

運営資金面では、一般的な学習塾に比べて格段に低い利用料に加え、今年度は「[公益財団法人樫の芽会](#)」「[認定NPO法人ぎふハチドリ基金](#)」という二つの助成団体から支援を受けている。

3年半近くにわたって平日週3日の開講を続ける中で、これまで利用する子の保護者からは「週3ではなく、平日は毎日開けないか」「夏休み中、家だとどうしてもスマホや漫画に手が伸びてしまう」という声があった。そのため開講日の拡充や夏・冬休みの学習会を検討したこともあった。だが、中山間地は支援する側になりうる人材も少ない。主にマンパワーの問題から実現ができないままだった。

そうした中でスタディーキャンプの開催を提案してくれたのが、岐阜協立大学（岐阜県大垣市）3年生の西瞭昭さんと加納圭真さん、長浜バイオ大学（滋賀県長浜市）3年生の池戸寛太さんの3人だ。

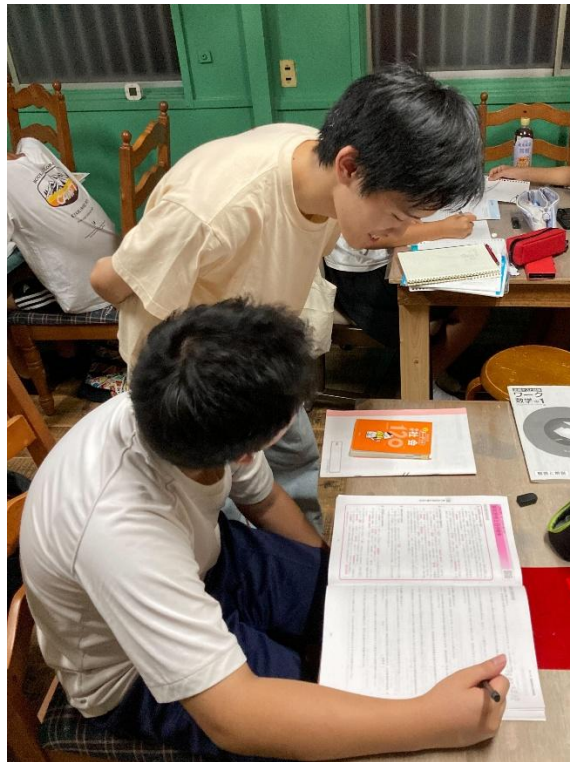
1年半ほど前、岐阜協立大学の授業で寺子屋シアンの取り組みを紹介する機会をいただいた時、熱心に話を聞いてくれたのが西さんだった。その授業をきっかけに寺子屋をサポートしてくれるようになり、その後友人の加納さん、池戸さんにも声をかけて通ってくれるようになった。

3人は主に高校受験を控えた中学生たちと接する中で、学習リズムを崩しがちな夏休み中のサポートの必要性を感じたという。そこで、西さんたち自身が主体となって現場に入る形での特別学習会開催を申し出てくれた。勉強に苦手意識を持つ子が身構えないよう、できるだけフランクに「スタディーキャンプ」と銘打ち、お盆明けの8月18日～22日の平日5日間、13時半～16時半の時間帯に中学3年生を対象に開いた。

■大学生に聞いた、スタディーキャンプを開いた理由

——なぜ夏休み中の特別学習会を開こうと思ったのか？

西さん：普段の寺子屋では、勉強嫌いだったり苦手意識があったりで、頑張れるポテンシャルはあるけれど、誰かの見守りがないと先へ進めないという子が多いという印象でした。これまで自分は、そうした子たちがますます勉強嫌いにならないよう優しく接することの方を心掛けてきましたが、きっちりとメリハリを付けることも大事だなと。「いまは勉強の期間だ」という気持ちで取り組んでもらうために、夏休みにみっちり取り組むというのはよい機会になるのではないかと思います。



社会の学習についてアドバイスする西瞭昭さん

池戸さん：メリハリはいつも以上に意識しようと、私たちで話して取り組みました。それは中学生たちにも伝わったのかなと感じます。説明した要点をプリントに書いて、頑張って覚えようとしていました。何より、「疲れた」とか「帰りたい」とか、ネガティブなことを言わなかったですね。



理科の質問に答える池戸寛太さん

加納さん：社会や理科のキーワードも、普段より覚えるのが早かったよね。



数学の学習をサポートする加納圭真さん

西さん：テキスト 1 ページのキーワードを覚えるのに、これまでは 20 分かけてもなかなか覚えられなかったのですが、「15 分で」とタイマーをセットしてやってみたところ集中して取り組んでいました。逃げるんじゃなくて、頑張ってみようという姿勢で学んでくれたのがうれしかったです。

■年齢の近い大学生、親しみを持ってもらえる機会に

――5 日間で感じたこと、印象に残ったことは？

加納さん：信頼関係ができたかなと思います。受験勉強に一緒に取り組み、休憩時にはスマホゲームの話をして、という時間を連日のように過ごしたので。

池戸さん：大学生という年齢の近い関係なので、これまで以上に親しみを持ってもらえる機会になったかと思います。コミュニケーションがとりやすくなりました。

西さん：漢字を使わずひらがなで書くクセが付いている子がいましたが、頑張って書くようになったのが印象的でした。夏休み明けの実力テストに「寺子屋で夏にやった問題が出て解けました！」とうれしそうに言う子もいて、自信につながっていただきたいと思います。

池戸さん：一方で課題は、自分たちが見ていないところでも同じように取り組んでくれるかというところかなと。

西さん：せっかくのやる気が、夏休みだけで終わってほしくないよね。

池戸さん：また、小規模校区のため寺子屋にくる子たちは学年を超えて仲が良いですが、せっかく仲が良いのであれば、もっと上級生が下級生に教えてあげるような関係があると思います。

■「ナナメの関係」が与える刺激

参加した中学 3 年生たちは、スタディーキャンプを終えるころにはきっと疲れ切っているだろうと、私自身も思っていた。それが大学生たちの言葉の通り、むしろいつもよりやる気に満ちた表情をしているのがとても印象的だった。本人たちからは「勉強しても疲れていないし、むしろ楽しかった」「今年イチバン勉強した」という声が聞かれた。9 月に入ってから、「これ、夏にお兄さんたちとやった問題だ」と言いながら数学の計算問題に取り組む姿が見られ、成長がうかがえる。

夏休みのさなか特別勉強に時間を費やし、頑張って取り組んだという経験が自信になり、また次の前向きさを生むという好循環が感じられた。自転車のようにペダルをこぎだす時はちょっと重たいが、そこを乗り切ると勢いに乗るという、そんな感覚だ。

今年 2 月、学習支援に携わる岐阜大学の学生と座談会をしたときに「ナナメの関係」という言葉がキーワードに上がった。(※ 2)

※ 2 : OKB REPORT 2025 Vol.197 『子どもと大学生がつながる、地域の居場所の未来』

中学生から見たナナメ上のセンパイ、そんな存在の大学生から受けるちょうどよい刺激があったのだろうということも、大学生たちの言葉から感じられた。

少子化が深刻な中山間地において、こうした大学生たちの存在はとりわけ貴重だ。何より、西さん、加納さん、池戸さんの 3 人がいなければこのスタディーキャンプは実現しなかった。遠方からサポートに来てくれる大学生たちの存在の大きさを改めて感じる機会となった、この夏のスタディーキャンプだった。